

いつも当社システムをご利用いただきありがとうございます。
今月分の請求書をご査収の程よろしくお願い申し上げます。

いつも大変お世話になっております。

蝉も夏バテしそうなほどの酷暑が続いておりますが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

いつも歌舞伎に誘ってくれる友人達に「もう5回観たよ」「めっちゃよかった」と勧められ、大ヒット上映中の映画『国宝』を観ました。第78回カンヌ国際映画祭では、上映後には観客の拍手が約6分間続いたと報じられており、日本でも歌舞伎ファンはもちろん若い世代からも支持を集めています。SNSでも「国宝、みてきました」という投稿が多くみられ、注目度の高さを感じます。普段、映画館にはあまり行かないのですが、歌舞伎を題材にしたこの作品は評判通り見応えがありました。

幼いころから稽古を積み重ねる歌舞伎役者の役を、吉沢亮さんと横浜流星さんが違和感なく演じていることに驚きました。俳優ってすごい！！撮影までにどれほど稽古をしたことでしょうか。おふたりの女形はもちろん、人間国宝の女形を演じる田中泯さんの妖艶さも圧倒的でした。俳優陣の美しさはもちろん素晴らしいのですが、登場人物たちが抱える葛藤にも心を揺さぶられました。

物語は、任侠一門に生まれた主人公・喜久雄が、縁あって名門歌舞伎一家に引き取られることから始まります。御曹司の俊介と喜久雄は同い年で、ひとつ屋根の下に暮らし、共に学校に通い、毎日厳しい歌舞伎の稽古に明け暮れます。対照的な出自のふたりは、この後も対照的な人生を送っていくことになります。

喜久雄は類まれなる容姿と才能を持ちながら「血筋・家柄」を重んじる歌舞伎界で、幾度も壁に突き当たります。神社で内縁の娘に「何をお願いしたん？」と聞かれた喜久雄が「悪魔と取引してたんや。日本一にしてくれるんやったら、なんもいらんって。」と答える印象的なシーンがあります。光と影、愛と憎、善と悪、相反するものが、血筋と才能に絡み合いながら物語は進んでいきます。

結果的には、様々な苦難を乗り越えて人間国宝になり「日本一の役者になる」願いは叶ったわけですが、決して幸福に満ち溢れる結末ではありませんでした。己を貫くこと、夢を叶えること、成功すること、幸せになること、それらは必ずしも同じではないのだと思いました。そして、人それぞれの幸せの形があり、他人が推し量ることはできないのだと考えさせられました。フィクションとわかっていても重苦しい反面、自分の心の底を見つめずにはいられないような力のある素晴らしい映画でした。

その半月後には、七月大歌舞伎「八代目尾上菊五郎・六代目菊之助 襲名披露」を観にいきました。菊之助さんは11歳。大名跡の襲名としては異例の若さで史上最年少の襲名ということです。映画とは違って血筋と才能の両方を持ちあわせた菊之助さんの小学生とはおもえない見事な舞と堂々たる舞台姿に驚かされました。

将来的には、「国宝」と呼ばれる日が来るかもしれませんが、伝統と格式や周囲の期待を背負いつつも、彼自身にとって人生が素晴らしいものでありますようにと祈らずにおれませんでした。

立秋をすぎたとはいえ、まだまだ暑い日は続くようです。どうぞ皆さまも熱中症には気を付けて、十分ご自愛くださいませ。



(C)吉田修一／朝日新聞出版

(C)2025 映画「国宝」製作委員会

まだ上映中のようにです。ぜひご覧ください！

満員御礼の松竹座



一番端とはいえ、前から5列目の席で、

臨場感がありました。

襲名披露口上で俳優陣がずらりと並ぶシーンは
映画を彷彿とさせました。



今月も最後までお読みいただき
ありがとうございました。

来月もよろしくお読みいたします。